



熊本六街道 天草路

宇土の道・天草の道

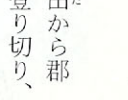
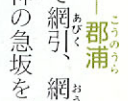
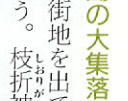
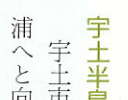
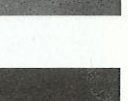
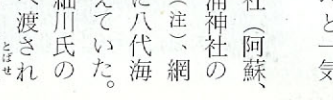
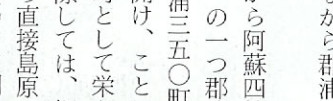
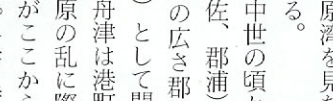
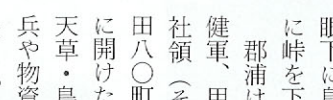
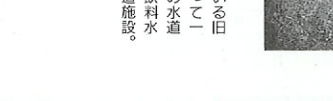
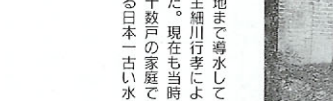
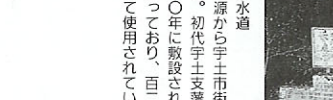
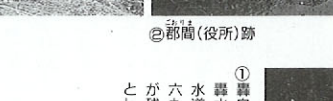
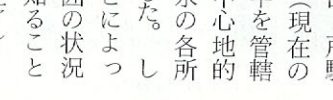
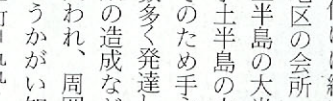
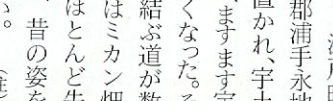
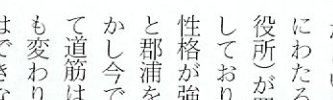
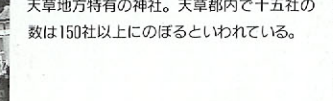
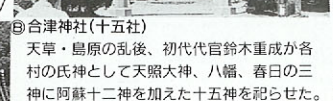
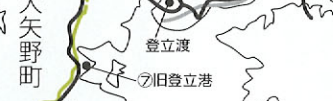
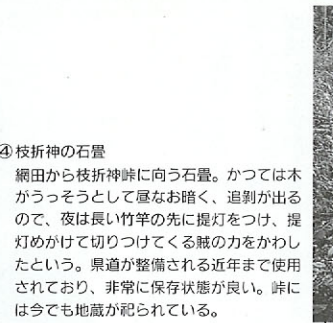
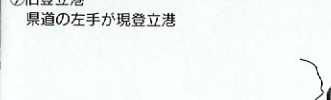
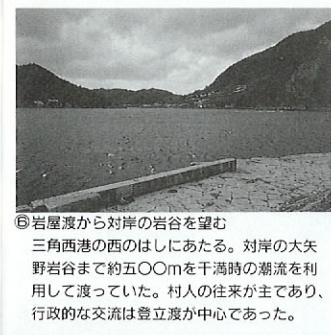
「天草路」は宇土の札の辻を起点に三角、大矢野、松島、有明、本渡、五和を通り芥北町富岡へと至る道である。この道筋には「薩摩街道」「豊後街道」などにあつた、方向や距離を表す道標・里数木が見られない。江戸時代天草は天領(幕府の直轄地)、宇土半島は肥後領であり、両者の交流はそう頻繁ではなかった。また、四方を海に囲まれた天草との往来には船を利用するのが一般的で、陸路を旅することはほとんどなかったため、肥後国から富岡への一本の街道としては確立されていない。旅のための道としての性格がないのである。肥後国内の道(宇土・三角)と天領の道(天草諸島の道)二つに分けられる天草路は、主に隣村や近在の村々と交流するための生活道路、領主・代官が村々をおさめるための道だったのである。六街道の中で唯一、目的地を冠した名称で呼ばれないことが、そのことを物語っている。

諏訪神社の門前町―本渡

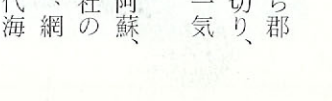
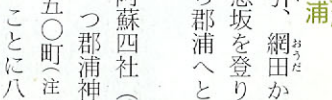
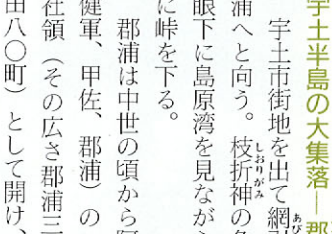
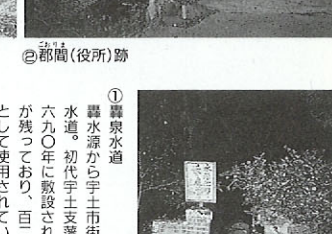
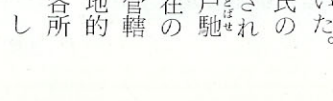
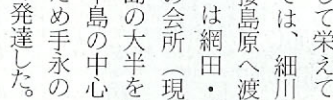
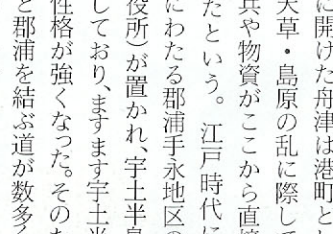
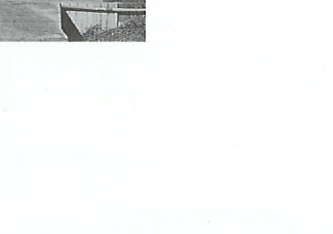
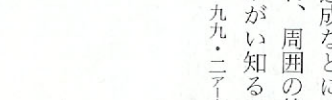
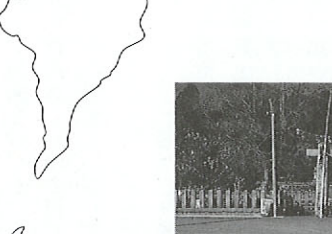
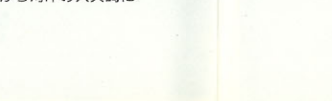
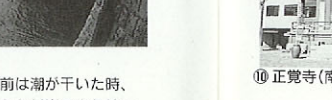
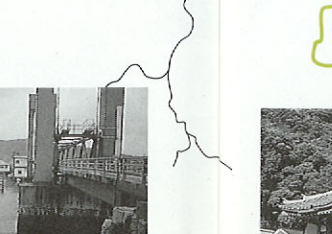
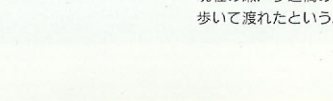
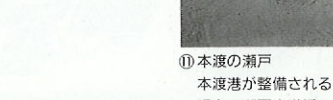
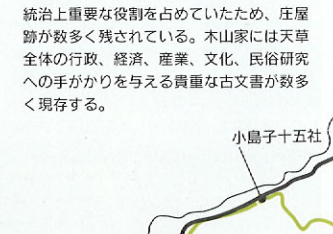
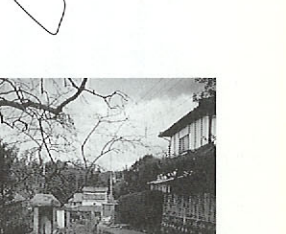
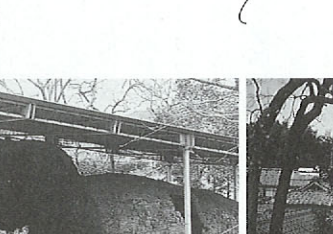
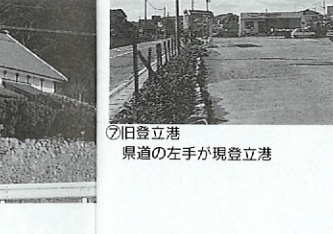
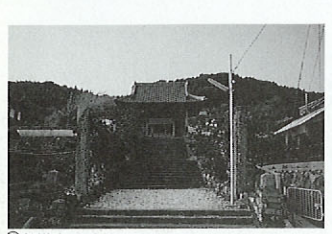
天草に入って岩谷・柳・合津・教良木・大浦を通って上島北海岸沿いに道は進み、本渡の瀬戸を渡って本渡市へと入る。市内の中心街に入ると諏訪神社がある。天草では「天草・島原の乱」の折に多くの神社仏閣が焼き打ちにあつた。乱が平定され、天領として統治が始まるとすぐに、人心の安定をはかるため早急に神社が再興された。諏訪神社もこの一つで、この時から八月一日の大祭で農具市が開かれるようになった。これが当時商店が少なかった天草で、次第に農民が生活必需品を買い求める雑貨市「本渡の市」へと発展したという。「本渡の市」は九州三大市の一つといわれ、当時の神社(現在アーケードの商店街になっている中心街の一角)を中心に海岸線が露店や見世物小屋でうめつくされていた。この市に来るため大勢の人が往来し、島内各地と本渡とを結ぶ道が形づくられ、唐津や長崎から直接船で訪れる人もあり、舟運も発達。本渡は門前町として栄えた。「本渡の市」は現在も毎年十一月一日からの一週間開かれ、大変な賑わいを見せている。

天草行政の中心―富岡

海岸線をたどり富岡に着く。天草が天領の頃代官所・陣屋(富岡城)が置かれた富岡は、天草行政の中心地であった。当時行政上の連絡事項(触書など)は、代官所から島内の各郡会所―庄屋へと伝えられていたため、富岡を起点に本渡・牛深への道が確立されたのである。経済的にも良港として有名な袋浦(現在の富岡港)での長崎交易をはじめ、大阪屋・万屋・唐物屋などの天草を代表する商人が手広く事業を行い、小さな城下町富岡は活気に溢れていたという。今いざなぎ瑞林寺の前から富岡城跡へと続く町並が、昔の城下町の面影を色濃く残している。



天草路
JR
現在の国道・県道



宇土半島の大集落―郡浦

宇土市街地を出て網引、網田から郡浦へと向う。枝折神の急坂を登り切り、眼下に島原湾を見ながら郡浦へと一気に峠を下る。郡浦は中世の頃から阿蘇四社(阿蘇、健軍、甲佐、郡浦)の一つ郡浦神社の社領(その広さ郡浦三五〇町注)・網田八〇町)として開け、ことに八代海に開けた舟津は港町として栄えていた。天草・島原の乱に際しては、細川氏の兵や物資がここから直接島原へ渡されたという。江戸時代には網田・戸馳にわたる郡浦手永地区の会所(現在の役所が置かれ、宇土半島の大半を管轄しており、ますます宇土半島の中心地的性格が強くなった。そのため手永の各所と郡浦を結ぶ道が数多く発達した。しかし今ではミカン畑の造成などによって道筋はほとんど失われ、周囲の状況も変わり、昔の姿をうかがい知ることができない。(注)一町＝九九・二アール

(参考文献) 熊本県歴史の道調査 天草路
昭和59年3月 熊本県教育委員会発行
お問い合わせ
熊本県教育庁文化課
TEL(096)263-1111